

**福島第一事故に関するセミナー第5回**  
**(平成24年8月20日)**

**防災に関する課題**

## 事故時の実際の防災はどうだったか

- 避難は、結果として、おおむね順調に実施された。
  - 大量の放射性物質放出が起きた時期(3月14日深夜以降)より前に、ほとんど避難は完了していた。(決して国の防災計画が適切だったからではない。)
  - OFCと各町の災害対策本部が直接連絡をとれた。
  - 避難情報の把握、避難の指示も、おおむねうまくいった。
  - 必ずしも十分な情報のない中で、現地の首長が適切な判断を下した。
  - 多くの方は、自家用車でなく、バスで避難した。(一部で渋滞も起きた。)

## 事故時の実際の防災はどうだったか(続き)

- しかし、次のような問題はあった。
  - 震災初期には、地震動による電源喪失や光ファイバーの断線のため、情報の途絶があった。OFCにもほとんど情報が届かなかった。
  - 避難者は、一時的な避難と思って、着の身着のままの避難をした。その後の生活に困難をきたした。
  - 要支援者(災害弱者)の避難は必ずしもうまくいかなかった。(JCO事故の教訓は反映されていなかった。)
  - OFCでは、放射線量が高くなったあとも居残って対応することになった。

## 防災に関する検討課題(1)

- そもそも、日本の原子力防災は虚構そのもの。国際基準ともかけ離れた仕組み。  
(事故が起きて、初めてまともな議論。)
- 事故の最中の、情報の入手・分析さえ困難な時期に、大型計算コードで事故進展とソースタームを定量評価し、その結果で退避や避難を判断するなど、技術的には論外のやり方。
  - 専門知識を持たなくても防災ができるという幻想につながった。
  - 事故のあとでさえ、十分な反省がなされていない。

## 防災に関する検討課題(2)

- 大きな事故はいつでも思いもかけない(想定外の)原因で起きる。事故進展の過程でも思いもかけない事象(直流電源の喪失による計測の喪失、原子炉建屋での水素爆発、…)が起きる。必ず大きな不確実さを伴う。
- 原子力防災では、そういう状況下で、可能な限りの確な判断を下すことが必要。そのためには、防災関係者が十分な専門知識を有することが必要。
- 防災の仕組みも、詳細な情報が得られ、詳細な分析がなされるのを待つのでなく、最小限の情報(炉心溶融が起きた！水素爆発が起きた！等)だけで予め決められた方法で、即時に対応できるものであることが必要。(国際基準はそうなっている。)

## 防災に関する検討課題(3)

- 防災に関する各組織の役割分担及び指揮命令系統の明確化が必要。
- 防災に関わる各施設(OFC等)の役割分担と機能要件の見直しも必要。
- 住民避難のためには、事前の計画が重要。
- 外的事象の影響やシビアアクシデント時に起き得る事象の影響なども考慮に入れての対策が必要。
  - e.g. 地震動で避難経路が失われることはないか？
- 要支援者への対応など、きめ細かな検討が必要。
  - JCO事故の教訓であったはず。

## 防災に関する検討課題(4)

- 災害時の情報伝達のあり方を再検討することが必要。
  - プラントパラメータが伝わらなかった問題は、第3回セミナーで議論。
  - 防災に関わる情報でも、共有できたものとそうでなかったものがあった。
  - 公衆への情報伝達のあり方も。
  - 国外への情報発信のあり方も。

## 防災に関する検討課題(5)

- 人口密集地における避難はより困難。外国の例(たとえば、米国のIndian Point発電所の例)も参考にして、実効的な避難のあり方を考えることが必要。
- そこでは、事業者、規制当局、地方自治体の役割の再検討もなされるべき。
- シビアアクシデントが起きてしまった後に、土地の汚染、海洋の汚染を最小限にする方策も考えておくべきではないか？